

報



會

會 岳 山 本 日

72

月 一 年 三 十 和 昭

日本山岳會

誕生の年月

武田久吉

もう十幾年か前のことになるが、高頭君が『太陽曆年表』を著はされた時、その一本を頂戴した小生は、同君の根氣のよいのに且つ驚き且つ感心し乍ら、その頁を繰つてゐるうち、記事欄に掲げてある事項に、何某歿すといふのが非常に多く、誕生の年月日が恐ろしく少いの気が附いた。例へば寛政十二年の記事欄には、十六名の死歿が擧げてあるに反して、誕生は唯の二人しかない。それでもまだ良い方で、寛政十年の項には十八名の忌日が掲げられるも、一人も生れた記事が載つてゐない。勿論斯ういふ所に掲載されるのは、所謂名士の部に屬する人達のみには相違ないが、それにしても、生れる数が少くて、死ぬの許り多いのでは、甚だ以て心淋しい。

其處で畏るゝ高頭君に伺を立てた處が、この記事は總て數十種の確實な典據から引用したのであつて、夫等の書物には、とかく逝去の年月日は記してあるも、生誕の日は滅多に見當らない結果、生れる人よりも死ぬ人の方が多い様に見えるのである。名家で世嗣の誕生した時の如きは、その年月日を精しく記録してあるが、布衣乃至西夫下郎から身を興して、終には武將とか名人とかに成つた人は、その死亡するに際しては、時には喪を秘して發せざること数日といった様なことが行はれたにせよ甚しい不正確さもない記録があるが生年月日に至つては、とかく不明瞭なものが多いいのだといふ説明を承つたので、如何にも首肯することが出来た。

現今の如く、戸籍法によつて、出生届は十四日以内と規定されてゐても、丙午年の末に産れた女子は、數日乃至十數日も延して、翌年の初めに出生したかの如く届出ることすらあるといふ程だから、昔はその邊が相等亂脈であつたに相違なく、日は勿論、月さへ漠然たる人々が少くなかつたのも、敢て怪むに足らないことと思はれる。甚しいのになると、年の方も怪しいのすらないでもない。

處で、これに似た事柄が、日本山岳會の誕生にも附き纏つてゐることは、餘り有難くはない様なものゝ、事實なのだから致方がない。明治三十八年の秋、當時は唯山岳會とのみ稱した今の日本山岳會が、呱呱の聲を擧げた日は勿論、月も今となつては、正確には判明しないのは實に遺憾千萬である。然し乍ら、それが同年の十月末頃か、遅くも十一月初めあたりであることについては、疑ふの餘地更になのである。それは、『山岳』第三十一年第一號二一三頁

にも書いて置いた通り、明治三十八年十一月二十五日發行の『博物之友』第五年第二十九號三五二頁の會報欄に「山岳及び山岳ニ關係セル一切ノ事ヲ研究スル目的ヲ以テ本會内ニ「山岳會」ト稱スル一支會設立サレタリ」と立派に掲載してある。

何故山岳會を日本博物學同志會の一支會として設立したかといふに、今日ではそんな心配は毫もないのだが、當時では斯かる會を結成した處で、到底獨立の存在が危ぶまれた世狀であつたからなのである。それ故假令會務や事務所等は別であつても日本博物學同志會として、役員も小島、高頭、城の三氏を除けば、他の四人の發起人は兩方兼任であつた譯である。そして會名も單に山岳會とのみ稱し、日本の二字を加へたのは、明治四十二年六月に、獨立した時の事である。

山岳會の會費は、當時は通常會員は年額金壹圓であつた。それで日本博物學同志會の會員で山岳會の會員となる者には、八拾五錢に低減される特典が與へられてゐたものである。

山岳會が成立する頃、之を獨立の會とするか、支會とするかについて、再三協議した。そして終に支會とすることに決したとしても、それは唯役員の間で承知してゐれば済んだ譯であるので、そう決定したのが、何月何日であらうと、別段大きな問題ではなかつたのである。そして勿論

創立總會の如きはやる意志など毛頭なく、唯皆の者が知人に吹聴した外には、前記の通り、『博物之友』に會報として發表しただけであるのだから、この時を公表の最初と認めるとするなら、明治三十八年十一月に結成されたと見る可きである。

そして初めは、同好の人達が百名近くも集ればよい方だらう位に考へてゐたのに反して、百數十の會員名を數へた時は、その意外なのに茫然とした程であつた。

昭和十二年十二月の『會報』七一號を見ると、或る集會の席上で、冠氏は日本山岳會の成立を明治三十九年四月として講演されたと自身記して居られる。實の處『山岳』第一年第一號が明治三十九年四月に發行され、その巻頭の設立主旨書には四月五日の日附がある爲め、この時を以て設立されたかの様に考へ易い。だが事實は前述の如くであること、嘗て私が『山岳』第三十一年第一號にも記した通りである。この號を見られない方もあるかといふ懸念も手傳つて今こゝに更めて記すことゝした。今後は會員たると否とに拘らずこの點について誤つた考を持たれないことを切望する。殊に役員又は役員たりし方は、發起人であるとないつとに拘らず、一切の謬見を捨て去つて戴き度いものである。

(昭和十二年十二月十二日認之)

× × ×

「利根川圖志」の著者 赤松宗旦義知のこと

行方沼東

(上越國境を語る山岳書の中に利根川圖志の名を見るので直接山岳に關係は薄いが記述してみた)

利根川圖志六卷の著者赤松宗旦義知先生は文化三年(丙寅)七月十四日下總國相馬郡布川村に生れた。父は赤松宗旦惠(美雅)といひその先妻を子なくして失ひ、後添として下總國印旛郡吉高村藤崎勘左衛門の妹ひさ子を迎へた。一子義知はこの母より生れたのであつた。赤松家は南朝の忠臣赤松則村を祖とし先生の祖父時代にはるる幡旗の國より布佐の松岡氏と共に印旛沼開拓の用務を帯びて東國に移り來りしものといふ父惠は初め江戸の下町に住し次で常陸の土浦に來り寛政八年(丙辰)布川に居を移し専ら醫業を營んで居つた。仲々多藝であつて詩歌俳諧生花に通じてゐた。先生の五歳のとき兩親は再び東都千住に移つたが八歳にして父を失つたので母と共に母の生家吉高村に歸り十一歳の頃より同村の醫家前田宗現に就いて醫術を學んだ。長じて天保九年(戊戌)再び布川に居住し父祖の醫業をつぐこととなつた。先生資性磊落長身容貌魁偉殊に眼光は常に鋭く人を壓するの趣があつたさうだ醫業の傍ら寺小屋

を開いて子弟の教育に志し常に諸國を編歴する文人墨客は先生の許に足を留めその食客の絶えたることはなかつたといふ。俳人一茶の來りしことあり葛飾北齋また圖志の起筆中に寄食した、北齋は其の頃師の怒りにふれて布川に來り先生の許に身を寄せ圖志の挿繪を描いたが身を隠してゐたために圖志の繪に北齋の落款を殊更に誌さなかつたとの事である。また同じ頃一人のみやびやかな御方が先生を訪ねられて暫らく居られたがその御方が病に罹ると京都から立派な籠をもつて迎へが來た、この方は京都の由緒ある公卿で何か罪を犯して東國に逃られたのださうで、その時にも籠に乗られる際紫の絹の紐をもつて縛めの形を作りなどせられたとのことである。先生の學問を好まれたことはその所藏の書目によつても判る。書目は現在残つてゐるが醫家の専門書醫論等を始め文學地理歴史に關するもの凡そ六百五十餘冊に及んでゐる。その中に神山魚貫編の麻葉集二卷や伊能願則の香取四家集などもあるし日光山志、佐倉風土記の如きもあつたが先生の没後教育者となられた子孫が諸校に轉任されるのでその移轉の多いため遂に殆ど全部が逸散して仕舞つた。利根川圖志の版木の如きも長持數個に藏されてあつたといふが現在全くその一枚をも残されてはゐない。

先生は文化五年(戊辰)下總國印旛郡大森役所使番鈴木友七の三女とよ子を娶られたが不幸安政乙卯年五月二十六日に四十八歳にて先立たれたので、後妻として常陸國稻敷郡源清田村宮本五左衛門の長女たけ子を迎へた。この後妻のたけ子は裁縫をよくしてその指南をしたさうである。明治十一年八月十一日六〇歳で沒した。

先生がその名著利根川圖志を作るに當つては並々ならぬ苦心をせられたので、後妻として常陸國稻敷郡源清田村宮本五左衛門の長女たけ子を迎へた。この後妻のたけ子は裁縫をよくしてその指南をしたさうである。明治十一年八月十一日六〇歳で沒した。

先生がその名著利根川圖志を作るに當つては並々ならぬ苦心をせられたので、後妻として常陸國稻敷郡源清田村宮本五左衛門の長女たけ子を迎へた。この後妻のたけ子は裁縫をよくしてその指南をしたさうである。明治十一年八月十一日六〇歳で沒した。

また
右ノ通り四月十四日改濟開板被仰付候
より納本に際しては
一、利根川圖志 六冊
右者當四月十四日御改相濟申候ニ付此節出來仕り候間獻納仕候以上
下總國相馬郡布川村
醫師 赤松 宗旦
午五月十九日
右
御取次 小石川菊坂田町角
武川 興五郎様
聖堂御學問所
御儒者出頭
佐藤拾藏様(佐藤一齋のこと)
同
御儒役
林 大學 頭様
開板の願ひにて内容の改めがありそれが済んで出版し學問所に獻納したのである次に之を發賣するに當つてまた願書を差し出してある。

南御番町 石谷因幡守様
右者
安政五戊午年七月十八日
諸國賣出 御免被仰付候以上
下總國相馬郡布川
赤松宗旦義知藏板
即ち三月出版の願ひをして發賣するまで五ヶ月を要してゐるなどについても當時の出版物に對する制度を覗ひ知ることが出来る。

圖志の出版には
畫鈎に本所石原住葛飾北齋
兩國藥研堀葛飾爲齋
堀大和守藩湖城喜一
松平下總守藩山形素眞
白銀町一丁目 玉蘭齋貞秀
中橋南傳馬町 一立齋廣重
筆鈎に 本所御船藏前高橋隨庵
序文に 淺草 辻 半嶺
自序に 兩國村松町 中澤雪城
彫刻に 太田攝津守藩渡邊與四輔
同 中橋紺屋町淺倉鐵五郎
をしてなしたものである。安政七庚申正月改
利根川圖志調帳 赤松軒によれば
二四二 賣本
六四 預本
九 チリ本
二七六 杉野氏
(この中に江戸行二〇〇あり)
五九一
外に アサ本 一九
ミノ本 一〇
全部で初版六二〇部を上梓せられたやうである、チリ本の中に新勝寺

の名も見える、江戸行として二百部これは日本橋一丁目の須原屋茂兵衛と上野御成街道の紙屋徳入で主として扱つたらしいと思はれる。其他は布川村内及び、その近隣に賣り販いた。六冊の賣價は一分一朱であつてこの本の總賣上は八十七兩三朱銀一朱一貫二百六十六文と記されてある。

預け本の中に藤藏河岸の千代倉五部として麻葉集六部預りと記してあつたが丁度麻葉集(神山魚貫の編魚貫とその門人の歌集中判上下二冊三橋鶴彦序文山ノ作圓融寺海應拔文安政四年九月)が出た頃と時を同じくしたのも面白い、麻葉集の巻末歌人名簿の中に常州河内郡藤藏河岸千代倉次右工門清英とあり千代倉なる人が歌人魚貫の門人であつたことや義知先生と交渉のあつたことが判る。

先生は初板出版の後二板を相當多冊出版せられたが折悪く幕末の黒船騒ぎの時出版物の賣り弘めは許可せられずその費用の爲に莫大の負債をもなされ本は遂に死蔵するも惜しいとして知人に分與された由である先生の著述は圖志の外に稿本で

布川案内記 一冊

(布川城跡の繪あり)

雜話 一冊

主として醫師の扱ひたる事柄多く隨筆風のもの最後まで記さず中途にて白紙となつてゐる。

利根川水源 外一冊

日本三大川 利根川御用御船印
御車流水 木下し旅人船御定
旅日記 一冊
等があり地圖に折本で

中利根川全圖 下利根川全圖
高臺堀割之圖
印旛沼ヨリ檢見川マデ
天保十四年癸卯年七月廿三日

銀初

同 年國九月廿三日止

等がある此の外に遺物として當時醫者の着た道服一重ねと帶刀の朱鞘一振がある、先生は一男三女を擧げて文久二年壬戌四月二十一日五十七歳を以て他界せられた、墓は布川町豊島ヶ岡の麓來見寺の境内入口の左側に、一丈程の簡素な一枚の板碑に赤松宗旦之墓と刻まれ裏に文久二年壬戌四月廿一日没同五年癸亥四月建正別に小さな石に筆子中と殘されてゐる、寺小屋時代の教へ子の建てたものとみえる。

先生の傳記について記されたものをまだ見ないが吉田俊文氏が熱心に調査せられたといふ話を聞いた。

以上は現存する布川の赤松家の資料によつて書き連ねたもので粗漏をまぬがれ難い、後日改めて詳記する機会を得たいと思つてゐる。

(昭和一二、九、二七)



山の消息

C・ジョン・モリス氏と語る

去十一月三十日日本旅行協會高久氏の御好意によつてC・ジョン・モリス氏に面會の機会を得た。周知の如く同氏は千九百二十二年度及昨年度のエヴェレスト登山に参加活動した人である。今回任地の印度を引上げ本國への歸途立寄つたのであつた。本會としても同氏を招待し度き意圖があつたのであるが何分にも滞在期間の短いために遂にその機会を得なかつたのは遺憾である。愚生より本會の意のあるところを傳へたるに會長宛鄭重な挨拶を寄せられた。話は主としてエヴェレスト登山の經驗を伺ふことである。其内二三を挙げれば同山岳の登攀は來年更らに試みられるであらうとのことであつた。而も西藏國の同山に對する許可がこの一回を以て終了するので廣くその成否如何を問はず最後のものと思はれるとのことであつた。勿論同氏

長野縣主催の登山講習會に就て

今回の目的は長野縣觀光事業の發展の爲、山小屋、山案内人、旅館、料理店其他の接客業者に對する講習會を三日間に亘つて開催されたのであつて、國際觀光局の市川八雄君、ツリストビニコロの山下一夫君それから私と三人が東京から出張した譯であります。

十一月二十二日は伊那の赤穂の伊那電鐵支社で開催。主に赤穂、飯島高遠方面の人が集まりました。大河原と遠山口の人は來ませんでした。人数は五十人位でしたが、中々熱心に聞いてくれました。講演の後で座談會を開いて山の人の意見を聞くことにしました。

十一月二十三日は新嘗祭で休み。上諏訪から霧ヶ峰に上つて見ました。頂上は新雪か一寸位で、車山は可なり白くなつてゐました。美晴の下に富士を中心にして日本アルプスの全貌、八ヶ岳、蓼科火山等、雲のない冬空の下に實に鮮かな姿を連ねてゐました。

十一月二十四日は大町の北安曇聯合會集會所で大體二十二日と同じやうな話をしたのです。聴衆は伊那位でしたが矢張り熱心に聴き又質問されました。

十一月二十五日は長野商工會議所で、市川八雄君と長野縣觀光協會主

も參加の豫定である。季節の問題に付ては來年はモンスーン前に試み更らにモンスーン後の場合迄考慮するつもりとのことである。此點は寔に面白いと思つた。又斯る山岳に對する隊伍の適切な人数に對する見解は寧ろ多勢の方が良いと思ふ。二萬五千呎以上に於ける體力の消耗が殊に甚だしいので常に元氣に充ちた補充力を必要とするからとのことである。ラトリツヂ氏なども同意見とのことと此點なども自分達が想像してをつたこと、餘り相違がないことを知つた。酸素吸入器のことに付いては寧ろ高度に順致して行くことを以て第一とはするが同器具を全く用意せざるは愚であるといつた。只其使用が如何にも憶劫に堪えないとのことである。同氏は兩度共登山隊の運輸を全部一人で處置されたのであるが同氏はグルカに長く在任した關係上土民の氣心も解り又言葉が自由とのことである。その他食料に付いては必要迫る迄出來るだけ罐詰の使用を避けたいものとも語つた。長期間罐詰一點張りの如何に無味なるかは誰れも同じことと見えて食料にも毎回隨分苦勞するらしかつた。

尙同日、本會のウェストン帥記念像建立の話をしその寫眞を呈上したのであつたが非常に喜んで受けられた。何れ機會を得て我國の山岳にも來たいとの希望を聞き又本會より英國山岳會への挨拶をも托して辭したのであつた。(横生)

事下平廣惠氏との観光問題及び接客についての御話があり、つゞいて私は「信州の自然を語る」と云ふ題で約一時間の講演をしました。そして二十六日に歸京致しました。

次に赤穂、大町で登山者としての希望、日本山岳會としての希望を述べた事柄及び山の人からの希望のやうなものを簡単に書き附けて見ます。

一、登山者として案内人に最も望ましく思ふこと

誠實と云ふことは勿論第一であるが、イザと云ふ場合に頑張り、のきく者が欲しい。悪場につづかつた場合とか天候悪化の時に際しても決して落着を失はず、却つて益々實力を發揮し得るもの。

サアピスは第二第三の問題で、どちらかと云ふとあまり細かい事まで氣を配らずに、ほつといつておいて貰いたいやうな氣がする。

山のカンのないこと、技術の勝れてゐることも大切である。要するに山が好きで山を愛する者が登山者には最も感じが良い。

總じて先輩である案内人は經驗に富み山を見ることが上手であり、若い人達は險阻にめげずに、それと聞つても山を知らうとする氣が濃厚であることは誠に頼母しい。

それから山の人と云ふ氣分を保存して欲しい。それは實にその山地に於ける地方色の重要な要素になる

ものであるから、出来れば風俗も保存して欲しい。地方色と云ふのは必ず風景のことばかりを云ふのではないと知るべきである。

次に案内人はある意味で權威を持つて欲しい。

今日のやうに登山が隆盛になつた時には、登山者の中には様々な人がある。案内人はそれだけ氣苦労がある譯である。

高山植物を撿取つたり、天然紀念物を毀損したり、團體でありながら勝手に自分だけ單獨行動をとるとか他のメンバーに迷惑をかけたたりする者もあるからさう云ふ場合には公共の爲めそれを制壓するだけの權威をもつて欲しいのである。

一、日本山岳會としての希望

私共日本山岳會では毎年五月に各案内組合及び山小屋の持主へ問合せ

狀を出してをります。それは毎年登山期の前に山小屋の料金、案内料を山日記で發表して一般登山者の便益を計つてゐます。それですからその年度のものを是非五月下旬遅くも六月初旬までにはお知らせ願ひたい。

毎年私共は案内人の調べを作つてをりますが、どうも案内人の年齢が相異してゐたり、死亡者轉住者等の名が削除してないことを後に氣付くことがあります。これも御注意を願ひたい。

それから案内人の歸途の日當や車馬賃の規定のないことも不便のやう

に存じます。

一 山の消息、道、小屋、案内人の異動、料金の改正その他交通關係のこともなるべくその都度山岳會の方へ御知らせ願ひ度い。それは月刊の會報で發表しますから。

山小屋料金の統一、案内料金の統一、これは山小屋の主が協議して同一方面の小屋の料金はなるべく統一する、案内の方でも組合同志協定する。そしてそれを警察署管内で統一し更に府縣が統一すれば非常に理想的だと思ひます。

大體北アルプスの方面ではよく出来てゐるやうに考へられます。

小屋はその位置によつて料金に差等のあるのは當然ですが、たとひ縣が異つてゐても同じ方面、同じ狀態にあるものは料金を是非統一された

い。

山小屋の番人の滞在期間等も登山期前に發表したいと思ひますのでこれは特に正確な處を御報告願ひたい。明示した滞在期間に登山した處既に番人が下山してゐた爲に非常に困つたと云ふ例もあります。

山小屋の料金をなるべく安くして欲しいと云ふこと、サアピス本位を廢し、實質的な食事、用具を用ひて出来得るだけ最低料金にして頂きたい。

近頃はサアピスをよくして小屋料を上げる傾向が著しいと云ふ批難があるやうです。

自炊制度について、最も高い位置

にある山小屋では、自炊規定があつても小屋の人が喜ばず、そしてその料金も不廉であるから、高い處の山小屋では寧ろ一定期間自炊制度をよした方がよいと云ふ説が大分あります。

これは山小屋、案内以外のことですが、處によつては自動車料金が不定の處があります。バスがあることになつてゐても、人の少ない時にはハイヤーでなければ出さないと云ふやうな都合な處を見かけました。これは當局の方の御注意を煩はしたいと存じます。

一、山の人からの希望その他

山小屋の番人が滞在期間を守らないことも悪いが、登山者にも随分ひどいことがある。何月何日に二十人得上から頼むと云ふので、態々食料品等を山小屋まで上げて待つてゐると遂に登つて来ず、それきりすつばかりにするのがある。登山の盛期ならばよいが期節後れになると折角上げた食料は無駄になる。そればかりでなく案内者までも損害をすると云ふ仕末。かう云ふのは是非どうにかして欲しいと云ふ。

ハイキングの輕装で白馬方面へ行く人が大分あつて、風雨雲霧に悩まされて遭難に近い騒ぎをすることがよくある。その都度地元で迷惑をする。

穂高で遭難したある學生の人達も實際あまりにも輕装であり、併も山

の經驗のない人達の爲に、登山者も非常な目に遭つたが、山の人も随分迷惑したと云ふ。

客に高山植物をとることをよすやうに忠告すると、何だ！こんなに澤山あるのに一本位と頭からおどかさされる。それで案内人としては二の句がつけない。

高山植物を濫採するのは、遠方からの登山者よりも土地の青年團、學生群に多いと云ふ話。

山日記の案内人の中にはスキ一の出来る者の印があまり多すぎる。實際冬山に役にたかない者、また未熟な者にまで印をつけてあるのは困ると云ふ。

地元からの希望では單獨行は是非やめて案内人を雇つて欲しいと云ふ。實際遭難の時のことを思ふとゾーツとするからと云々。以上

昭和一二、一一、二八（冠）

陸地測量部新版地圖

五萬分一 地形圖 修正

名古屋 七號 四日市

同 八號 津東部

同 十二號 津西部

宇治山田 五號 松阪

中津 二號 祝島

五萬分一 朝鮮地形圖 修正

洪城 四號 咸悅

木浦 八號 靈巖

同 九號 浦川里

十二年十月三十日發行

山登りについで(四)

ヤング

補助用具、ビトン等のこと——岩登りが普及し、機械萬能の時代が出現し、それに岩場の専門家が增加するに伴つて、今迄になかった新しいテクニークが現れて来た。このテクニークといふのは岩にベツグを打ち込んだり、それに關係した種々の器具を考案したり、或はそれにロープを下げたり、或はさうしたロープの使ひ方全般に關聯するテクニークである。このテクニークの詳しい説明は茲には省略するが、このテクニークが果して山登りの術の一部門をなし得るかどうかは、現今異論のあることである。ともあれこれに關しては次のやうなことだけでも茲に指摘して置くことは必要であらう。——このテクニークの「原則」といふのも、他の山登りの原則と同じく、現今の岩登りの實地に於て最も優れてゐる傳統を公式化したものにすぎない。従つて凡ての實地と同じやうに時代の變遷につれて、これも亦異つて来るものであり、このテクニークも亦要するに「原則」化されないのである。

切なことに相違ない。そのために我々の生のまゝの能力と山の有する自然そのまゝのものとの間に人工的なものを介入せしめることは登山者の自由である。例へば身體や眼特に膝を保護するために被服を用ひ、脚のために革底、ゴム底、靴、トリクニー、マムメリースバイクスを用ひ、氷に對してクランポンを、雪に對してスキーを使ひ、また手には手袋、ビツケルの類を、さては古めかしい梯子、ウイムバーの途方もない諸道具から、近頃流行のベツグ、リソグ腰あての類までも持出して来るのは登山者の自由である。

登山界のかういふ雲をつかむやうな問題に當面しては、いつたい何を基準としてこの「原則」を打ちたてよいかには迷はざるを得ない。がしかし山登りといふスポーツのためには、どうかしてこの基準を明確に定めて置くことが必要なのである。さう考へて、例へば、安全を計るに必要なものはよいと許されるが、成功を力添えするとか考へられない道具や工作は排斥すべきであるといふやうにきめて見たら、どんなものであらうか。しかしこの區別もどうやら試験には合格しやうになく、實際から見ても支持され得ないことは幾多の事例によつて明瞭である。茲にリーダーが登攀最中であると思定して見やう。汝は自身の安全のために岩の突起にロープをヒツチしながら行動するとして見やう。これ

れは一應は尤もな處置のやうであるが、かうした確保によつて成功し得たためしは先づ稀といはねばならぬ。今度は場面をかへて彼が一つのクラックを登つてゐると想定して見やう。恐らく彼は自然に挟み込まれてある岩や石をかりて、これにロープをヒツチしたり、その後にロープを「通し」たりすることであらう。しかしもしこの岩石が極めて不安定なのに氣づきながらそれでもなほ同じやうにロープをかけ直したり挟み直したりするであらうか。そんなことをなほ押しきつてやる位の彼であれば、最初の石が落ちて了つても、なほ新しく他の石をさがして、それにロープをかけ直すとも限らない。しかし、これも駄目で結局このクラックを斷念するより外に手がなないとすれば、彼は他のクラックを捜し出して、他の場所でもひそかに拾つて来た小石をポケットから取り出して、これをこのクラックに挟み込むやうな眞似をやりかねないだらう。しかし、よく考へて見るのに、こんの眞似をする位ならば、自然に挟み込まれてゐる工合の悪い石をたよるよりも、よく適合してゐるメタルベツグを打ち込んだ方が、安全といふ點から見てもどれ位優つてゐるか分らない。

も一つ同じやうな例を擧げて見ると、登攀の水準が漸次高められるにつれて今迄の自然な登り方の外にそれと異つた様々の登り方が考へられるやうになつた。従つて今迄のやり方では確かに通れるといふ箇所にも新しい登り方によつては試みて初めて通れないと知れるやうな惡場の一つや二つ三つは必ず存在することとなつて来た。かりにある素晴らしい岩場の終りに近い所でこんな惡場に行詰つて了つたとしやう。その昔ならビツケルで、今ならビトンによつてリーダーがバアティ全員の安全を計り、そのためこれを切りぬけて成功したらどうであらう。このリーダーに批難の矢を放つものは恐らく一人もないだらう。これと異つてかりにこれから大きな登攀にかゝるといふ初端の所でこんな行詰りに出合はしたとしやう。もしリーダーが別のベツグの如きもののおかげでこれを乗り切り、この岩場の残つた部分を新たに人力の達し得る領域となすことができたならどうであらうか。この場合にも同じやうな「原則」が適用されないものであらうか。

何年か前のこと。我々のバアティはグラランド・ジョラスの東山稜を目ざして登つたが、到底普通のやり方では手に負へないことを知つた。その直後、今度は、東山稜を降つて見たけれども、最後に僅かばかりの惡場に突き當りどうしてもそれを乗り越へねばならぬことになつた。そこで、我々はビトン一本を打ち込んで、ロープのラストマンを確保し、見事にこの初通過に成功することができた。しかし、我々がビトンを使

つたことについては山登りの正統さを破つたとは少しも考へなかつた。數年後、他のバアティが同じやうにこの山稜を登つた。我々のビトンは降りよりも登りのバアティにとつて必要だつたが、この時はそれを利用して更に二三本を打ち込んだといふことである。この詳しい話をきいてから、私は急にこの登攀に興味がもてなくなり、近頃、便宜主義といふのはこんなものかとさへ考へたのである。いつたい、この登攀に於て我々と彼等との間にどんな相違があるだらうか。彼等はファーストマンのために、我々はラストマンのためにビトンを使つたといふだけの違ひである、兩方共ビトンを使用したためにバアティ全員が一つの登攀の開路に貢獻することができたことになるけれども、我々の場合には、ビトンは全く自然に使はれ、他の者が登攀をなしたつたのち、最後の一人の安全のため、彼を確保する手段として使つた。これに反して、彼等の場合には、唯一人の者を除けば、彼等の登攀もまた「自然」な方法であつたには相違ないけれども、私はこの場合のことを想像するだけでも精神的に排斥したい。これらの例によつて考へて見ると、かうした場合に一つの「原則」を規定しやうとすることによつて、我々は奇妙な自己矛盾にさへ陥つて了ふことに氣がつくのである。

かやうに、我々が原則といふこと

を以て律することもできず、またそれを掴むべき緒口をも求めることができないことになつて了ふ。かうなる上は、——同じ論法を以てすれば——また、我々は次に述べるやうな事態をもそのあるがまゝに認めてよいといふことになる。ベツグや補助用具は熟練者によつて安當な制限を附して、しかも絶対に必要な場合にのみ使用される。従つて茲ではこれを活用する知識は少數熟練者の知識であるべきだ。しかるに岩登りが普及し、それに關する様々の手ほどき本が流布されるに従つて、この知識も廣汎なる人々の常識とまでなつて了つた。さうなつて了つた以上、シッウェツグの如き見事な岩のクラツグが休暇の季節には深山のベツグ打ち共によつて針差し頭の頭になつて了つても、またネイブスの山稜は夏のシーズン過ぎた頃にはまるではりねずみのやうに針だらけの背中になつて了つても、仕方がないことであり、我々はこんな状態を取へて見のがして置かねばならないといふことになる。それと云ふのも、ピトンは元來熟練者がドタン場に於てのみ使用して然るべきであるのに、前述の如き型の登山者は、それほど必要でもない場合に、無暗に使ひたがるのであるが、また彼等のかうしたピトンの使用方法が全く誤りであるとも我々には斷定しきれないのであるから尙更さうなのである。

そこで、この場合の解決方法はどうか。原則云々を持ち出したり、傳統云々をかつぎ出したりするのは何もならない。たゞ我々の確かに據り所となりうることは、若い登山者の間に純潔なスポーツマンシッブの觀念を高揚し、これを失はしめないやうに努めることである。ところで、登山精神に、このスポーツマンシッブを強調するために、我々は一度本文の冒険に立歸つてその第一原則を強調せねばならない。即ち山登りには唯一の原則があるだけで、山登りといふアドヴェンチュアを最高限に發揮することであり、同時に我々の衡量の分別と離れないことである。確固たる衡量の分別といふのは、我々の安全を期するために、何時、如何なる場合、如何なる用具を利用すべきかを、我々の冷靜なる判斷を通じて我々に忠告してくるものである。純眞なる氣持を以て、アドヴェンチュアの最高限を發揮しやうとする者のみが、補助用具を使用して、その時の成功を獲ることを許されるのである。我々の判斷と我々のスポーツマンシッブの精神とだけでは尙不充分で、どうしてもこの補助用具がなければ、アドヴェンチュアを遂行し得ないといふ場合、かゝる例外の場合にだけこれは使用さるべきである。この外に何等かの疑問を生じた場合、我々の判斷の指南となりうるものは、登山者に課せられてゐる二つの義務である。この義務といふのは

前にも述べたやうに、山岳をして自然美の寶庫、自然力の寶庫として徒らに傷けないこと、山登りそのものを、立派などこに出しても恥しくない、仕甲斐のあるゲームとするものである。

山登りとは讀んで字の如く山に登ることであるが、それは兎角の世評を氣にしておの「山の征服」では決してない。かくの如きは山に對する冒險である。山での惡場が我々の喜びの思ひ出となりまた苦しみと思ひ出となるのは、この惡場が我々にとつて、或はよき體驗となり、或はよき訓戒ともなるからである。山頂だけを望むのなら山登りには長い生命はない筈である。登攀は素晴らしいことであるが、絶頂に達することをのみ求めるのは、山を數でこなさうとする競争者、或は記録ばかりを目的とする者の喜びでしかない。といふやうな登攀のかうした相對の意味が充分に納得せられ、廣く培はれたことになれば、我々の登攀の慣例やそれに對する様々の工作・巧案が誤れる動機によつて奇妙に歪められることはなくなるだらう。さうなれば、またこの堂々たるスポーツを、世間の賣文家の錢勘定のために冒瀆することとはなくなり、くつろいだ楽しい登山といふよりも、登山者自身の功績やそれに對する世評を眼中において多くのベツグ打ちに浮身をやつすこともなくなるであらう。

雪に對する技術(スノークラフト)

——この實際並に理論は基本的には岩登りの技術と同じである。急峻な雪斜面では我々自らホルドを刻みつけそれを唯一つの頼りとせねばならない。従つてサイドキック、トウキックのやうな足さきの動作やアックスのエイズブレッドの振り方を雪の上で練習せねばならない。ハンドホルドは稀にしか得られないから、巧みにバランスをとり乍ら雪のステツプを登降しなければならぬ。そのためには脚筋肉を上手に使ふ必要があるが、雪のステツプ上では要するにこの上に脚を巧みに運ぶこと、詳しく云へばステツプに正しい角度で脚を運び、次にとるべきバランスに支障のないやうに正しい位置に脚を卸し、そして正しくステツプから脚を脱くことが肝要である。如何なる角度に於てもとかく斜面の内方に凭れ易いが、これをさけるためには、是非ともステツプ上に直立し得る習慣をつけねばならない。山側の手又はアックスで雪面を支へると、登降動作のバランスを容易にとれることになるが、我々は雪の傾斜度、その面の状態、その深さによつて、或はアックスのシャフトを突きさしたり、或はピックでアンカーしたりしてインディレクトのホルドを確保するのである。

軟雪の上では、無駄な動作をしないうこと、なるべく脚の揚げ方は低くすることが、勢力や氣分を消耗させず之を維持する上に大切である。脚

を運んだり、前に振り出したりするやうな身體のスウェイは、また雪の状態の許す限り、一步一步のリズムとシツクリ合はなければならぬ。雪の上を長い間突き続けるとひどく疲れてくるし、氣持がくさつてくる。だから、適當な方法で氣分の轉換を計らねばならない。

雪そのものの性質、我々の自重を支へるかどうかといふ雪の地合、斜面はどんな角度から雪崩れるか、どんな調子で雪崩れるか、等々のことはたゞ體驗によつて學ぶより外ない。アルプスの雪は一定の法則に従つて四季に變化する。だがヒマラヤの雪については全く別個の研究が必要である。積雪の状態と氣象、風向との關係は、氣節により温度により觀測の方法及び場所によつて夫々に異なるものである。

雪の上でのロープ——登攀者の間のロープは引きもせず引かれもしないやう適當に保たれて居る事が大切であつて、急斜面で前方を登る者のロープを強くひき締めることは雪面にロープをひき摺ることと同じくさけるべきである。しかし、登攀者相互の間隔を變へるためにも、また危機に面した場合の用意のためにもその前に連なる者のためにも一と捲、二と捲のロープを手許に自由に殘しておくことが望ましい。雪に掩はれた氷河の上では各人間の間隔には特に注意を要し、ロープはいつとも張

きつて一寸の長さもゆるめないこと
また陽が昇つてからは前の者の姿を
見失はぬやうにすることは肝要であ
る。危険を豫想されるやうな雪の上
で他の者をアンカーしやうとするに
は、斜面の状態に應じアックスのピ
ック或はシャフトを雪につきさして
これにロープを捲きつける。雪の上
でロープをディレクトに使ふ場合、
これが萬一切れて惹起する危険は岩
にディレクト・ビレイする場合に比
べれば危険は少いけれども、アックス
だけによる確保は山側の確實な突起
に確保するほどの効果はない。従つ
て我々は自分の筋肉や身体にスプリ
ングとしてロープの間に介在させる
こと、かくしてビレイを出來るだけ
インディレクトにすることを心掛け
ねばならない。

氷河、クレヴァス、雪底等のこと
は技に省略して置くけれども、たゞ
これらのことを實地に研究するには
必ず熟練者を伴はねばならないこと
だけを附加して置く。

氷に對する技術(アイスクラフト)

氷の上でステップを切つたり刻
んだりすることは何といつても登山
技術の花形である。ステップに對し
ての足の運び方は、岩登りに於ける
身體のこなし方、手足の協同連繫、
バランスを保つての登降動作が總べ
て應用されるわけであるが、たゞ氷
の上ではハンドホールドなしに相當
大きな動作をさねばならないことだ

けが異つてゐる。ステップを切る練
習は薪割がよい練習となるが、これ
も氷の上で實地に練習することにした
ことはない。

氷面の斜傾度、氷の性質により、
ステップをきるストロークも、その
方向も形も異つて来る。しかしこの
ストロークのため、斜面上で身體や
肩を餘り大きくスウィングすること
は多くの場合危険を伴ふ。これをさ
けるには腕をもつてのスウィングが
最もよいとされてゐる。かういふ場
合腕は思ふ様に働かないが、その缺
點は、このスウィングをリズムミカル
にさへ行へば除き得るものであり、
かうしたリズムミカルな腕のスウィ
ングが最も効果的である。

氷のステップは山側に傾けて切り
その上に正確に足をのせること。そ
してよくバランスをとりながらその
上に直立して動作せねばならない。
ステップ間での動作は手やアックス
によつて補助するにはするが、この
ため山側にもたれてはいけなない。そ
れだからステップの上に安全に立つ
場合でも、その他の者をホールドす
る場合でも、我々の直立の姿勢が第
一の基礎になるのである。

氷の上でのロープ——氷の斜面で
はロープは氷の表面にふれないやう
いつもはなして居ること。ロープに
たのみやこぶやよりがでないやう
に、脚にからみつかなどしないやう
に保つことが肝要である。他の者を

アンカーし、ビレイする場合は、我
々自身がバランスのとれた確實なス
テップ上にあることは勿論その土臺
であるが、その方法は、アックスの
頭にロープをヒツチし、アックスの
ピックを深く突きさして、滑落によ
る張力に最もよく耐へ得ると考へら
れる角度にそれを保つこと。この唯
一のしかない、このヒツチは我々自
身のバランスを補強する方法として
使はれるが、これを『ディレクトビ
レイ』として使ふことは不確實であ
る。

技に注意せねばならないことは、
氷の上では、バアティがバアティ全
體として保證される共同の安全限界
は、幅のせまいゆとりのないものだ
といふことである。だから、一つの
バアティが安全に前進し得るために
は、そのメンバー各員の動作は、一
つ一つのステップを刻み、これに脚
をかけるにしても、輕卒、粗暴であ
つてはならない。その各員の動作は
極めて慎重で、精確で、しかも自制
をもつて行はねばならない。自分
のステップはその場限りの自分だけ
のものでなく、自分と同じやうに、
その次に續いて來る者達にとつても
安全なステップとして提供されなけ
ればならないといふことをいつも考
へて居らねばならない。

結び——本文に於て私は山登りの
實際問題を例にとり、山登りの原則
を取扱ひ、これについて少しばかり

概括を試みたのであるが、しかしそ
れは山登りの問題の極小部分にしか
當らないのであり、本篇全體は一つ
の例示として取上げらるべきもので
ある。最後に、私が再び繰返し述べ
て置きたいことがある。——山が嫌
であれば問題にならないが、山が好
きであるといふ以上我々は山でアド
ヴェンチュアをやらずにはどうして
も居られない。しかもこれを最も愉
快にやらうとするのが山登りの唯た
一つの原則なのである。しかし、こ
のアドヴェンチュアは、我々の經驗
の深さ、我々の秤量する分別心、山
といふ氣高い景觀に對する我々の崇
高の念、山登りなる堂々たるスポー
トに對する我々の尊重心を置き去り
にしたものではなく、これらの事柄
とシツクリと合致したアドヴェンチ
ュアでなければならぬ。我々のアド
ヴェンチュアに欲しいものは、健
全な勇氣と氣さくな氣質と出來れば
よい友達、これだけで結構である。

我々が他の者と共に山登りをしやう
とするには先、づその前に我々自身
を充分に叩き上げて、健全な思慮を
備へた安全な登攀者に仕込み、一度
ロープに連なつては、我をすて去つ
た無私の同志に仕込まねばならな
い。個人として優れた登攀者となる
には自分の四肢を鍛へ、自分の神經
を練り、いつも巧妙に大膽に平易に
動作しうるまでに仕上げねばならな
い。また優れた登山者となるには山
登りの根本精神をいつも高揚しつ

ゝ、判斷と體驗とを修得、蓄積せね
ばならない。他の者達と共同しての
山登りにはよき仲間同志の社會の法
則がそのまゝに、たゞ山登りの言葉
に翻譯されて適用されるのである。
(完)
(D・U 譯)

(第十頁二段目よりつゞく)

戰略を變へること三度、しかも最
初のパンケ高地よりの登攀と、第二
回目のパンケ氷河源頭よりの登攀と
ではその方向變換の努力だけでも並
大抵でないと推測されるが、こゝな
自由な行動のとれる處にも小規模遠征
隊の特徴が存すると見られやう。
(島田)

紫 岳 7

十二年十二月 静岡高等學校紫
岳會發行、菊版、一一八頁
刊頭「三月の聖岳」の美しい寫眞
が目につく。本文は三月の聖岳、易
老岳、春の荒川岳とその附近の三編。
記録は過去一ヶ年間のもので、そ
の足跡の九割までが南アルプスと靜
岡附近の山々を占めてゐる。
卷末に會計報告を發表してゐるこ
とはこの種の部報としては、珍らし
く參考となる。(T)

× × × × × × × × × ×



新刊紹介

Himalayan Camp Aign

The Attack on Kangchenjunga
By Raul Bauer. Translated by
Sumner Austin Basic Blackwell.
Oxford 1937.

222×14. pp. xviii. 174.

パウアが彼の率いるネパリア隊を以て敢行したカンチエへの二回にわたる登攀（一九二九年と一九三一年）は夫々報告書が出て、その素晴らしい迫力のある文は我國でも知られて居るが、その二回の登攀記を一冊にまとめた Kampf um den Himalaya が一九三四年に發行されたが、今回その英譯が上梓された。出版元はもとから山の本をよく出版し最近も Mountaineering Library の題下にレスリー・ステイヴンズやマンメリー、ウィルス、フレッシ

ユフィールド、ムーア等の諸先輩者の古典的著作の複刻を行つて居るマラックウェル書店で、厚手の紙に印刷されてガツツリした本である。感じから行けばやつぱり原著の方がいいが、寫眞は原著の全部をグラビュア版で複製したので、原著程の美しさはない。定價は原著より高く特價で七圓二〇錢。

Everest: The Unfinished Adventure

といふ題で一九三六年度の遠征報告が出版されたのが、やつと我々の下に到着しました。三三年のと同じくラトレツチ隊長の筆になる紀行と、他の隊員の分擔になる調査と、寫眞集との三部から成る大部なものです。つづれ會報又は「山岳」紙上に詳細な紹介を行ふつもりです。圖書室にも一本を備へましたから、不取敢お報せまじ。（圖書係）

スマイスの著書

Camp Six

An Account of the 1933 Mount
Everest Expedition by F. S.
Smythe,
Hodder and Stoughton Ltd.
London, 1937.
pp. xi, 307, 14.5×22.5.

The Mountain Scene

By F. S. Smythe, with Seventy-

Eight Reproductions of Photographs by the Author. Adams and Charles Black. London, 1937.
pp. ix 153, 20×27.5.

英國山岳界の猛者スマイスはさすがに本を書く方でも猛者の類である。古くカンチエやカメツトへ遠征した報告が歸國するや早速本になつて現れたのは我國でもよく知られて居るがその後も An Alpine Journey や The Spirit of the Hills, Camp Six などと相當の分量のものを書きこなして纏めあげる才能と精力はさすがにエヴェレスト二八、一〇〇呎の最高到達者の一人としての優秀さだと感心する。

だがスマイスの本は從來、このやうな矢張り早い出版の故か中にはかなり粗雑な印象を與へて惜しまれて居たのもあつたことは事實であつた。ところが近著の The Mountain Scene と Camp Six とはスマイスにとつては名譽回復にも近い立派な著作として現れた。

日記の持つ味も又捨て難いことはカンチエ登攀のネパリア隊の連中の日記などでも了解出来るだけに、日記を基礎にしたスマイスのこの書にも充分存在價值があると云へる。

スマイスは序文で次のやうに述べて居る。

——エヴェレストが登頂されることは疑ひない。來年かも知れぬし、又一ジエナレーション先かも知れぬが、遠征毎にその問題について我々の知識は豊富になつて行くが、結局は成功の決定權は運だ。最初から登頂には三つの問題がある。第一にこの山の難しき、これは二八、〇〇〇呎の高所だけに考へねばならぬ。第二は高度、第三は天候だ、技術と智識によつて初めの二つは解決されやう。しかし第三の天候は常に豫測を許さぬ要素である。一九三三年及び三六年度の遠征では人間が二八、〇〇〇呎以上の空氣稀薄な中で何等人工的補助なしに生存し得たことを確めはしたが、これも天候に撃退されたのだ。

しかし寫眞のよきよりもスマイスに我々が感心するのはその足跡の廣さで、足跡の廣汎でその業績の大きい點で當代稀れな著者だけにこの書の分類を見ても個人の著作とは思へぬ位である。試みにその章を列べると、一、英國の山々、二、東部アルプス、三、ベルナー・オーバーランド、四、ペンニン・アルプス、五、モンブラン山群、六、カンチエンジユンガ、七、カメツト、八、エヴェレストとなつて居る。

この書は初めから終りまで理窟抜きの紀行の敘述でその間に彼自身の撮影になるすばらしい寫眞を挿んで、それもなるべく公式報告書とは異つたスナツプショットを含んで居るので、爐邊に繙く登攀記としていいと思ふ。附録としてエヴェレスト山稜上で發見したアイヌアツクスについての記述があるので期待して讀んだがこれは三三年の公式報告書の

中の推定から一步も出て居ないので失望した。

×

The Mountain Scene

の方はスマイスの撮影になる寫眞集であり、寫眞を通して語る彼の山の話である。掲載された寫眞の枚数は七十八枚、これを上質紙に念を入れて印刷し、一葉につき一頁づゝの簡單ながら趣深い説明を加へて居る。廣告文によれば數千枚の原板の中から選ばれたのが之だと云ふから寫眞のよきは自ら肯定されやう。

呪（この本では何の思ひ違ひか又は誤植か一九三六年となつて居る）の地點から撮影された寫眞が置かれて、これは寫眞的には無價値だが、地球上の最高所で撮影された寫眞なのだからと註釋を試みて居る。しかもこの寫眞を撮影したことについて著者自身何の記憶もなく、後で現像して見て始めて知つたといふ不思議な二八、〇〇〇呎以上における登攀者の心理を述べて居るのは興味深い。

大體こんなスケールの大ききで心憎い配列を試み得る著者に羨望を感じるのは僕のみではないと思ふ。

寫眞はカンチエヤカメットやエヴェレストは夫々の報告書に掲載され、他のアルプスのものも、試みに彼の初期の著作である *Clims and Ski Runs* (1929) と對照して見たら大部分これに掲載されて居るものなので初見得るものは少いが、今度の本では前著に較べてすばらしく印刷製版がよいので寫眞は見違へるばかりになつて居る。殊にカメットにしろカンチエにしろ粗雑な本であつただけに、これが同じ寫眞かと思はされる位變つて居る。装幀に用ひられた水色のクローズと白色の文字はひどくスマートな感觸を出して近頃の英國の山の本には珍しい。

ある。それはヴェレンクツペからのマッターホルンの寫眞（第三十五圖）だが、こゝで著者は（マッターホルンは撮影するの一番やさしい山の一つであると同時に最も難い山の一つでもある。どこから寫しても効果的である點でやさしく、そのスケール、美しさ、壯麗さの故に難しい……）この感じは吾々が富士にカメラを向ける時に何時も感じることだと思つて特に面白く感ぜられた。繪葉書用の寫眞屋さんの撮影したお土産本やカレンダーとはかなり味の違つた山の寫眞の本だけに少々長々と提灯を持ちすぎた。（島田）

雲 庇（隨想集）

十二年十一月帝國大學新聞社發行、四六版、二八二頁、二圓、挿繪五葉、寫眞一〇葉

山の單行本も色々な形式に於て數多く出現されて行くが、これはと云つて飛付いて買ふやうな本は洵に妙い。又その反面、期待されながらも仲々出版されないものもある。「雪庇」は雪及び雪山を主題として、各方面の一流どころを動員してまとめられた隨筆集である。額装により見ても編輯者の見當はなかく、又その内容よりしても優れたもので、仲々讀みたえのあるそして親しみ得る、近來に珍らしい隨筆集であると思ふ。先年廢刊された雜誌「山」の合本を再び手にするやうな感を感じる。

執筆者の左の如し。

田部重治、結城哀草果、浦松佐美太郎、渡邊公平、石原巖、關口泰、高橋文太郎、足立源一郎、高橋健治、長尾宏也、武田久吉、中村左衛門太郎、中川善之助、柄内吉彦、田中薰、佐藤昌彦、田邊和雄、佐々保雄、深田久彌、清棲幸保、英木猪之吉、袋一平、三田幸夫、坂本直行、河上壽雄、今西錦司、渡邊漸、西堀榮三郎、小島三郎、松方三郎、山口昇

Joch 3

十二年十月三十日 東京慈惠醫大

山岳部發行、菊版、一五二頁、しばらく振りの部報である。二號發行以來五年目であるといふ。

本文としては前穂高又白谷の數年に互の研究を發表してゐる。奥又、中又、下又白谷等に項を分け、夏冬を通した研究記事。

次に追悼として、昭和十年四月下旬谷川岳一ノ倉谷で姿を消した山口敏彦、福田一雄兩君の追憶及び、遭難顛末報告がある。これによれば十月下旬まで約半歳に至つて部員は非常なる努力を拂つて、數十回遭難地附近の搜索をつゞけ、幽ノ澤に福田君の遺骸を発見するに至る顛末を詳細に述べてゐる。記録としては昭和八年・昭和十一年迄のものを地方別に頒け、各項解説の筆を加え、兎角無味乾燥に陥り易い弊を救つてゐる。

山の消息 (二)

マナ・ピーク登頂

カメットの南々東三哩に聳へる二、八六〇呎（七、二七三米）のマナ・ピークが今夏スマイス氏によつて初登頂され、スマイス氏はカメットと並んでこのガルワールのジャイアンツ二峰に輝いた足跡を印した、この報告が十一月十八日のタイムス紙上に掲載され、直ちに在佛の藤島氏から送付されたので左にその大要を摘記する。

×

一九三六年のエヴェレスト登攀隊の一員であつたオリヴァー大尉とスマイスとは本年（一九三七年）七月二十二日 Bhagundar 溪谷で相會し同名の峠（一六・六八八呎）を越えてバンケ溪谷に入り、バンケ氷河最北端一四、〇〇〇呎の地點にベースキャンプを設定した。例のヒマラヤ小遠征隊主義によつて二人は五十封度の荷を運ぶのに五名のポーターを従へたのみで、この中一名はシェルバ、四名はプーティアでいづれもタイガー連で人夫頭はエヴェレストの猛者ヌルブ（オンディ）であつた。印度測量部の R・A・ガーディナー中尉が探検したバンケ氷河北岸のバンケ臺地（この探検は本年春から初夏に行はれ、シブトン、ティルマンのナンダ・デヴィ内院探検以來の

興味深いものだ）とスマイスは云つて居る）に取付き第二キャンプから二一、四〇〇呎峰に登つてプラトリー帯とカメットを展望したが、これによつてマナ・ピークの前衛をなす二二、四八一呎峰及び二二、八九二呎峰の中腹を巻くことの不可能を覺り、進路を南方に變じ、八月四日二〇、二〇〇呎に第四キャンプを設け、二二、四八一呎峰に登つたが天候不良で見通しがきかず翌日更にこの峰に登つて前進の可能性の有無を検したが、數千呎の斷崖に遮られて結局退却を決意せねばならなかつた。

かくて方針を變更し、次にはバンケ氷河の源頭からマナ・ピークを偵察するに決し、氷河を遡行し、八月十日ザスカール峠一八、八九二呎に立つたが、こゝから眺めるマナ・ピークも決してよくなく、直接の攻撃は不可能事なので二一、五〇〇呎の西南の支峰をトラヴァースすることに僅の望みをかけ、同日同支峰に登つて觀察したところ、北西稜からマナ・ピークへ取付けば一、〇〇〇呎の急斜を登りさへすれば登頂の可能性あることがわかり、早速翌日二〇、〇〇〇呎までキャンプを上げた。この位置はより高くしたくはあつたがこれ以上は固定ロープが人夫達に必要になり、それに日を費して好天のチャンスを選するのが惜しく、四、〇〇〇呎の高差ではあつたが、この位置で我慢して人夫を峠へ歸らせた。翌八月十一日は午前四時に朝食、五



會務報告

新理事選任報告

本年度理事改選に際し、改選せらるべき理事五名に對し役員總會から同数の理事候補者を推薦致し十二月申會員各位に御通知申し上げ各位より候補者推薦を御待申して居りました處締切日たる十二月十五日迄に御推薦の向無之、改選すべき理事の數と同數と相成りました。

從て義に役員總會の推薦致しました、五名の理事候補者は會則第十二條並に細則二の(ハ)に據り投票を行はすして當選、本年一月より就任せらるる事に決定致しました。

新任の野口末延、吉澤一郎、早川義郎、石原巖、宮崎武夫の五氏は何れも山には深い經驗を有する方々で本會今後の活躍見るべきもの有りと思ひます。何卒會員各位に於かれましても倍舊の御支持御後援を賜はらんことを懇願致します。

先は右不取敢御通知迄

昭和十三年一月

日本山岳會役員總會
會員各位

十二月定例理事會

十二月九日 虎の門本會事務室

出席者 木暮、横、冠、武田、黒田、茨木、島田、高橋、島山、木村、角田

一、山岳第二號編輯の件

一、會員大會及晚餐會の件

一、新理事選舉の件

一、ウエストン記念事業の件

一、長野縣學務課主催講習會報告

一、英國エヴェレスト隊員C・ジョン・モリス氏來朝の件

一、昭和十三年度豫算の件

退會者

昭和十二年十二月申

一二六六 大坂市 西口久一

第八十二回小集會

十月二十六日 於大阪堂ビル清交社
時局柄ではあるが、野戰、山岳戰における行動、長途行軍、物資供給の困難など登山行爲と多分の聯關性ある點において、他の趣味團體とは大いに異なるものあることを思ひ、豫定された期日には遅れたが小集會を開催することに決定し、題目も特に最近神戸において成立した山岳遭難救援相互組合および京都方面で議せ

られてゐる同様の組織に關して、その事情を聴き、意見を交換することに目標をおいた。けだし遭難は登山の最大の非常事の一つであり、これが対策を講じ、綿密な作戦を練つておくことの必要はこれまでも力説されたところであるが、アマチュア團體として、この種のことに手を染めたのは、恐らく今回の二つの團體が最初であらう。十月二十六日大阪堂ビル清交社の會場を集つたのは左の諸氏で、關西での小集會としては、出席者數が、これまでになく少數であつたのは、偶然にも同じ日に他の團體の會合が開かれたためであつた。

津田理事司會のもとに午後七時開會、上述のやうな趣旨のスピーチがあつて、神戸の組合について林、前田兩氏から詳しい説明があり、配付された組合規約、細則について二三の質疑があつた。しかしこの方は既設のもので目下事業が進行中であり結果を事實に見やうといふのが多くの人の氣持であつた。次で京都青年山岳同盟の手で立案中のものにつき森本次男氏から懇切を極めた説明があり、比良山脈における實施機關假想例及び各地の救護用設備、交通、通信、宿舎、人事などの資料蒐集のための調査票案などのプリントを示された。京都側の組織については未設のものであるだけ相當活潑な質疑應答が行はれて、青年同盟の意圖する綿密な捜査網に對し種々の意見が

提出され、大津、麻田、北岡、角倉らの諸氏からその一について事情説明があつた。本部常備用としての調査票案は記入項目細密にわたる一同は深くその必要性を感じた。

神戸組合の組織は加入者相互の救助を目的として地域を限らず、財政上の據點を準備してゐるに對して京都同盟の企畫では京都中心の山岳地帯を限定してその各登山道の全路線に對してあらかじめ受持を定め、通報があれば如何なる登山者の救助にも赴かんとする立前であり、救助費用の事前準備をなさず、その都度家族負擔によつて處理する仕組である。この兩組織については一長一短ありなほ檢討の餘地を残してゐるかに思はれるが、京都同盟の案も近く實現されることであるから、今は机上論よりも實際の運用において、この兩特徴が如何に生かされるかに注目されるべきであらう。

なほ同席上、山口秀次郎氏より遭難救助よりも先行すべき遭難防止の施設及び訓練の方法に關して同氏多年の經驗よりする意見の發表あり、一同深くその意を諒とした。午後九時五十分散會。この日、京都ならびに神戸よりわざわざ來阪説明に當られた兩國體幹部に對し厚くその御好意を謝する次第である。

當日の出席者氏名左の如し。

木藤精一郎、名古屋常治、鈴木克英、諏訪多榮藏、加納一郎、前田光雄、西岡一雄、前田房男、津田

周二、宮田健一、宮崎武夫、森本次男、大津新一、麻田俊一、北岡正一、角倉太郎、山口季次郎、大中彰一、林潔、中原繁之助
以上二十名

昭和十二年度年次大會

昭和十二年十二月十六日(木)午後六時より日本橋區日本商工俱樂部に於て年次大會を開催(會報七十一號發表の會場三會堂は都合により變更)木暮會長、鳥山、黒田諸氏より本年度の事業、會計報告等あり、ついで晚餐會に移つた。

來會者約四十名

新着圖書

ケルン 十二月號 同編輯室

寫眞月報 十二月號 小西六本店

ツーリスト J. T. B. 十二月號 日本野鳥の會

野鳥 十二月號 日本野鳥の會

登山とスキー 十二月號 其社

山小屋 十二月號 朋文堂

地學雜誌 十一月號 東京地學協會

紫岳 第七 靜岡高校山岳部

コッホ 第三 東京慈惠醫大山岳部

雪庇

東京帝大新聞社

山岳展望 著 深田久彌著

者

The Geographical Journal 11

The Scottish Mountaineering

Journal No. 124

Mountaineering Journal No. 4

Sierra Club Bulletin 10

Appalachia 11

The Prairie Club 11

Trail & Timberline 11

Natural History 11

Die Alpen 11

La Montagne 11

Rivista mensile C. A. I. 10

De Bergsids 11

Bulletin du Club Alpin

Tchecoslovaque 10

購入圖書

R. C. F. Schomberg:—

Unknown Karakoram 1936

F. S. Smythe:—

Camp Six 1937

P. Bauer:—

Himalayan Campaign 1937

H. Rutledge:—

Everest the unfinished

adventure 1937.

編輯後記

新たに昭和十三年を迎えるに當り

會員諸兄の御健康と今後の御發展を祈り上げます。

K2への遠征計畫が入國不許可によつて挫折したことは吾登山界にとつて誠に残念なことでありましたが近き將來に於て再舉を計り、遠征實現の日の一日も早からんことを希望する次第です。

第十一頁會務報告にも發表の通り昭和十三年度の新理事五名は既に決定しております。一月の理事會に於て新たに事務分擔を決定し、新しい希望を以て、會務の遂行に當り度いと考へております。(角田)

投稿規定

◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限りります。

◇原稿締切 毎月五日

◇原稿用紙は十六字詰のこと

◇用紙御希望の方には會から御送りします。

◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。

◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さる。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十二年十二月二十九日印刷
昭和十二年十二月三十日發行

發行兼編輯者 角田吉次

發行所 東京市芝區琴平町一(不二ビル)
日本山岳會

電話芝(四五)一六四九

印刷者 植田庄助

印刷所 成文堂印刷所

營業種目

報道寫眞

商業寫眞

パンフレット・口繪用寫眞

ト・口繪用寫眞

圖書

繪畫

圖面

現象・焼付・引伸

高速度複寫

日本山岳會員
特別サービス

會員の經營するフォト・サービス・ステイションを御利用下さい。

貴重な山岳寫眞を高級な技術と良心的な仕上げをモットーとして御引受致します。

東京銀座二丁目・越後屋ビル四階

東京光藝社

電話京橋七一〇五一八

加藤恭平

「山岳」バックナンバー

Vol.	No.	定價	送料	Vol.	No.	定價	送料
4	1	¥2.00	9	14	2	.50	12
"	2	2.00	"	"	3	.50	"
"	3	2.00	"	15	2	.50	9
5	2	1.00	12	"	3	.50	"
"	3	1.00	"	16	2	.50	12
6	1	1.00	"	"	3	.50	"
"	2	.70	"	17	2	.50	"
"	3	.70	"	"	3	.50	"
7	1	1.00	"	18	1	.50	"
"	2	1.00	"	"	3	.50	"
"	3	1.00	"	19	3	.50	"
8	1	.70	"	20	2	.50	"
"	2	.70	"	21	1	.50	"
"	3	.70	"	"	3	.50	"
9	1	.70	"	23		.50	
"	2	.70	"				
"	3	.70	"				

日本山岳會